

# 「名付け」と「知識」の妖怪現象

## —ケサランパサランあるいはテンサラバサラの一九七〇年代—

飯倉 義之

### 一、ケサランパサラン、あるいはテンサラバサラ

ケサランパサラン、あるいはテンサラバサラというものがいる、もしくはある。巷間、そのように囁かれている。それは「飼い主に幸運をもたらす・科学では割り切れない・生物」であるといふ。そうした存在は、広い意味において「妖怪」といえらるだろう。実体と言説のあわいに棲まうケサランパサランを通して、いまここを生きるわれわれの「妖怪」を確かめたい。最初に確認するが、本稿はケサランパサランを事例として「ある現象がいかなる意味付けをもつて妖怪現象として発見され、流通しうるのか」の考察であり、「ケサランパサランの正体を探る」「科学では解明できない謎の生物を報告する」といった、未確認生物としてのケサランパサランを論じることは本稿の主旨とは異なる。こうした観点からの議論は、受け付けないこととする。まずはケサランパサラン、あるいはテンサラバサラとは「何か」ということから確認していく。

【資料1 ケサランパサラン】  
「小学校の花壇の」このへんで「ケサランパサランを捕まえた」といったやつがいましたよ。  
—どうなったの—

いや、こう「両手で」捕まえるんだけど、なんかこうやって「覗いて」るうちにどつかいなくなっちゃう、っていうことで。まあだから「タンポポの綿毛のような生物だ」というもっぱらの評判だったんで、ほとんどがタンポポの綿毛だつたんだと思いますけど。実際に捕まえて飼つてるとかいう人はいなかつた。一人も。

(話者は千葉県船橋市・女性・一九七七年生) 「飯倉」一〇〇二  
【資料2 ケサランパサラン】

「小学校の」そっちの山はマラソンコースに入つてないから誰も立ち入らないんだけどさ、そこで「友人」が「ケサラパサランを拾つた」って。で、当時学級文庫の必須図書の

妖怪事典によるとさ、「白粉を食べる」つていうから、家に

あつた白粉をケサランパサランと一緒に箱の中に入れて、「そ

したら減つてんだよ」つて、主張してた。そのあとどうし

たんだろうかね。（話者は千葉県佐倉市男性・一九七五年生）

【飯倉一〇〇二】

資料1、2は、一九七〇年代生の話者の、小学校時代のケサランパサランの想い出である。後述するが、ケサランパサランの知名度は一九六〇～七〇年代生まれの世代で高い。

この書き方のように、一般にケサランパサランは「白い綿毛、もしくは毛玉」であり、「白粉を食べて増える」「空から落ちてくる」「持ち主に幸運をもたらす」といった特徴を持つ、不思議な「生物」としてとらえられている。生物であるという意識は、話者らがその動向を「捕まえる」「いなくなる」「飼う」「（白粉を）食べる」と表現していることにもうかがえる。そしてケ

サランパサランは噂のみの存在ではない。川崎市市民ミュージアムで二〇〇一年に催された「呪いと占い」展には、ケサランパサランの実物が展示され、図録にも写真が掲載された「同館二〇〇一」<sup>(2)</sup>。神奈川県の個人蔵であるそれには「信仰」と「歴史」を前面に押し出した解説が附されているが、大筋では、右の一一般的な「ケサランパサラン」の範疇にある。

ところが実物を離れての解説となると、そうしたケサランパサラン像は搖らぎ、膨らんで茫漠としてくる。例として二つのの

「解説」を挙げる。

【資料3】山形市立博物館の「テンサラバサラ」展示解説

一つのころから名付けられたかは、わかりませんが、温海町の山あいの家では、家宝として受け継がれているそうです。2月から3月にかけて、部落の神社や深山の木のたもとに天から舞いおりてくるそうです。拾った人は、一生、幸福に恵まれ、家族も健康で暮らすことができるといい伝えられます。テンサラバサラは、1年に一度しか見てはいけないことになつており、二度見ると幸わせが逃げてしまうといわれています。立派な桐箱に、食べ物のオシロイを入れ、呼吸ができるように穴を開けて納め、神棚にまつて大切に守り続けています。神秘的な口マンを残しつつも、このように美しく丸くなるのが不思議なことです。【阿蘇一九九三】

【資料4】妖怪事典の「ケサランパサラン」

主に東北地方で見られる不思議な毛玉で、山形県ではテンサラバサラ（中略）という。ウサギの尻尾のような形をした白い毛玉で、小豆から鶏卵くらいの大きさとするのが一般的である。（以下数行、資料3とほぼ同じ説明。中略）

近年、都会でもケサランパサランを見たという人があるが、そうした人たちの情報を総合すると、どうやらタンポポの種子を大きくしたような綿毛の生えた植物の種子のことをいつているらしい。また、ケサランパサランとの関係は明らかで

はないが、『和漢三才図会』には鮓苔と書いてヘイサラバサラ、  
ヘイサラバサルと読ませる玉についての記述がある。獸の肝

胆の間に生じる白い玉で、小さいものは粟や榛くらい、大きいものは鶏卵ほどもあり、石や骨に似ているが、それらは別物である。蒙古人はこの玉を使って雨乞いをし、牛馬のものが最も効験がある。これはオランダから来た平佐婆佐留と同じもので、痘疹や諸毒の解毒に用いられるものだ、と記してある。〔村上一〇〇〇〕

实物を前にした資料3の解説は明解である。対して資料4の『妖怪事典』の解説は「関係は明らかではないが」としながら、毛玉の「テンサラバサラ」に統いて植物の綿毛の「ケサランパサラン」を挙げ、また獸の胎内で発見される玉の「ヘイサラバサラ」に触れて、同種の存在であることを匂わせている。同じ名称の下に動物質・植物質・鉱物質の、明らかに別種の存在が習合され、同一の存在として解説されている。

先に「まずケサランパサラン、あるいはテンサラバサラとは「何か」ということから確認していく」と述べた。がしかし、ケサランパサランとは「何か」と名付け、意味付けること、それが自体がある現象を「妖怪現象」として成立させていく、と思ひ当たる。そうした「名付け」が導く妖怪現象について、考察していきたい。

まずは、ケサランパラサンがこれまでどのように取り上げられてきたのかを整理していく。

一九五〇年代、『民間伝承』誌上で「テンサラバサラ問答」の応酬があった。きっかけは『民間伝承』一六一一(一九五二・一)に佐藤光民が発表した「テンサラバサラ」である。中学校の社会部員の採訪報告からテンサラバサラを知った佐藤は、山形県西田川郡念珠関村(現・温海町)に所蔵する四家を訪ね、そのうち二家四体のテンサラバサラを実見して報告した。このときには「白い毛玉である」「落雷の後などに落ちていて」「白粉を食べて増える」「いいことがある／金持ちになる」などの特徴が報告された。

それを受けて井上佐久良が「テンサラバサラ」を報告、「テンサラバサラは梵語であろう。不動経のナマクサラマンダバサラダや真言と関係があるか」という見解を示し、動物学の教授のエッセイを引用して「テンサラバサラはウサギの腹毛ではないか」と指摘した〔井上一九五三〕。

続けて宮武省三と蒲生明が「テンサラバサラ問答」(甲)(乙)を寄せる。宮武は「この種の玉の事は、本草綱目その他に、また我が国の文献にも、よく見らるるものであつて」と前置きし、文献にいう鮓苔の一種であると指摘。動物の胎内の玉の例を並べ<sup>〔3〕</sup>、鮓苔が雨乞いに使われ、祈雨に唱える梵語「ヘイサラダ・

「パサラダ」の訛化が「テン・サラバサラ」であるとして、「これら」の記事で井上佐久良氏の問ひのお答へはよいのではないかと思ふ」とし「宮武一九五四」、蒲生もまた、テンサラバサラはヘイサラバサラの訛誤であろう、生薬である漢語の鮓苔、ポルトガル語のペドラベゾアル、ペルシア語のパドザールと同一の「馬やその他獸類の腸内にできた病的產物」と結論している「蒲生一九五四」。

蒲生は鮓苔の語源について「新村出博士の辭苑でも、また大言海や大日本國語辭典のような辭書を引けば、忽ち氷解する」と述べているが、鮓苔は『本草綱目』等の文献に近しい知識人の間では、知られた存在でもあつた。<sup>(4)</sup> つまるところテンサラバサラ問答は、現物を置き去りにしたまま鮓苔の解説と語源説へと展開し、終息してしまつたのである。

『民間伝承』編者もこれには不満であつたらしく、蒲生論文の末尾に「編者から」と題して「ただ、ここに不思議なのは、両先生とも、最初にこのテンサラバサラを問題にされた本誌第十六巻第一号の佐藤光民氏の記事を読んでをられないやうに思はれることです。(中略) そこで問題となるのは、何故にまつたく異つたものをテンサラバサラと呼ぶやうになつたかではないでせうか? 両先生を初め皆様の御援助を得たいと存じます。」と記している。だがこの要請も虚しく、テンサラバサラ問答は『民間伝承』誌上から消える。

このテンサラバサラとヘイサラバサラの同一視があまりに速

やかなことが不自然に思えたが、この間隙を埋める事情を大島建彦氏よりご教示いただいた。当時、佐藤の報告を最も喜んだのは柳田國男であつたという。この報告を聞いて柳田は佐藤をたいへんに讃め、また即座に「これはヘイサラバサラだ」と指摘して、周囲に『民俗学』所収論文や南方熊楠の資料を示した。<sup>(5)</sup> テンサラバサラがヘイサラバサラであるという説は「柳田先生がおつしやつたということで、いわば定説みたいなものであつたんです」という位置を得ていた。

『民間伝承』誌上では、佐藤の提示した実物から乖離して、柳田・南方や宮武・蒲生といった博学の知識と結び付いた解説が先行し、問答は終結した。この点で、この問答が全ての始まりだつたといえるのである。

### 三、発見されるケサランパサラン——一九七〇年代—

その後日の目を見ることも無く、白粉と一緒に桐の箱に仕舞われていたケサランパサランであつたが、一九七〇年代後半、突如メディアのスポットライトがあたり、一大ブームとなつた。

【資料5】 ケサランパサラン・ブーム  
そもそもはこの夏、『朝日新聞』の地方版にちょっと紹介されたのが始まりらしい。

名前が珍妙だし、生きものだかなんだかわからない点もウ

ケで、その後、NHKがやり、TBSが取り上げ……ついに九月下旬には東京・池袋の西武百貨店で「展示会」ということにまでなった。(中略)この展示会には、カメラを持ったジャリビもが殺到、まるでスーパークーナミだったという。

『朝日新聞』の首都圏版に読者の電話投稿欄があり、ここも、この一ヶ月、ケサラン・パサランで持ちきりだった。「宮本一九九七(初出一九七七)】

#### 【資料6】ブーム当時のものいい

ケサラン・パサラン(またはケセラン・パサラン)は、「70年代前半の小学生の間で超話題になつた」謎の生物(物体?)なのだ/テレビでも紹介された/空から降つてくる/ピンポン玉ぐらの白い毛の/玉で/フワフワと勝手に動く/そしてこれを手に入れると/幸せになるという一説では/天使の毛玉と/いう話も広まつて/当時の小学生達は/放課後や体育の時間は/みんな空を見上げて探した/不思議なことに/おもしろいといつしょにしておくと/いつのまにか/増えているらしい「真倉・岡野一九九六】

資料5はそうしたブームの一例である。新聞が取り上げ、週刊誌が取り上げ、テレビがとりあげ、西武百貨店で展示会が開かれる、ということにもなつた。そうした当時のものいいを、資料6は漫画作品化し、また思い出話としても記録している。このときに子供たちが探し回った「ケサラン・パサラン」は、キ

ク科植物、特にアザミの冠毛であつたらしい「阿蘇一九九三」。阿蘇和夫はこうしたメディアの動きを「てんさらばさら」経過問答記録からとして、年表にして整理している「阿蘇一九九三」。それによると、まずは新聞の地方面で紹介されたものがテレビ局の目に止まり、一九七七年七月八日の「NHK朝のスポットライト」で、宮城県気の仙沼市の個人蔵のものと子牛田町の孝勝寺藏の二つのケサラン・パサランを中継、それを機に週刊誌や全国紙に注目されるに至つたようである。

阿蘇の年表は自身への問い合わせや執筆依頼、また自身が目に入った新聞雑誌記事やテレビ番組その他の記録であるが、一九五七～八年における全八〇件中、一九七七～八年の五年間で五六六件と、その大半を記録している。この五年間がケサラン・パサラン・ブームの全盛期といつていいだろう。

一九八〇年には、ブームの集大成として、ある女性が枇杷の木で見つけたケサラン・パサランの「観察日記」を出版する。西君枝による『ケサラン・パサラン日記』がそれである「西一九八〇」。これは自費出版であったが、克明な飼育記録としてメディアで取り上げられ、かなりの話題を呼んだ。また絵本では、わたりむつこ・ましませつこによる『てんさらばさらてんさらばさら』が刊行される「わたり・ましまー一九八一」。こうした本や創作が、ケサラン・パサラン像を確固たるものとした。ケサラン・パサランの知名度は一九六〇～七〇年代生まれの世代で高いと述べたが、それはこうしたメディアによる紹介とそれ

に付随した解説的なものによるものであるだろう。ブーム当時のものいいの検討もまた重要だが、本稿では先を急ぐこととしたい。

この時期のブームは沸騰してすぐ静まるのが特徴であり、ケサランパサランもその例外ではなかつた。ブーム以降、実物がメディアで流れる機会は減つたが、实物を離ることによつて逆にケサランパサランの「知識」が確立していく。

子どもたちのオカルトブームは、十年弱の波をもつて一巡する。近くは一九九〇年代後半の「学校の怪談」ブームがあつた。資料6のマンガ『地獄先生ぬ・べー』もその流れの一つである。ケサランパサランは「不思議なもの」の一つとして、おまじないとツチノコの間のような存在として、オカルトブームのたびに再発見され、囁かれる存在となつていく。資料1、2の話者のまなざしがまさにそうだろう。こうしたものいいを支えているのが「当時学級文庫の必須図書の妖怪事典」といった、資料4のような読み物であり、そしてそこには『民間伝承』をはじめとした、民俗学の知見が利用されている。

また、名称が広まるにつれ、耳に残る、聞いたことのある面白いフレーズとして使用されていく。コスメブランドの「ケサランパサラン」や、ケサランパサランを題名とする二つの漫画作品〔三浦一九八一〕〔桜沢一九九九〕では、製品や作品にケサランパサランは登場せず、説明されることもない。音の響きと不思議でかわいいイメージだけを利用している。他にも店名、

団体名・イベント名・ペンネーム等に利用している例を目にした。そこではもはや「実体」としてのケサランパサランは必要とされていない。

そうして一九九〇年代後半からは、インターネットの世界で「おおっぴらに囁かれる」とでもいい得る状況となつていて。現在インターネット上には、ケサランパサラン愛好家のサイトが複数存在する。その中でも活発に活動している「けさらんぱさらん・どと・こむ」では、「ケサパサ」の目撃談・飼つています・分けます・下さい等の投稿が飛び交つていて。「ケサパサ」を観察・飼育する人たちのコミュニティがネット上の「想像の共同体」で強く結びついていることは、この「妖怪現象」の一面を表わしている。それはケサランパサランが「実体」もしくは「身体」を離れて、「知識」としてしか存在し得ないとの、直喻といえるだろう。

#### 四、錯綜する「正体」

では、メディアで紹介されていくなかで、ケサランパサランはどういう存在であるとされていくのか、確かめていく。阿蘇は「テンサラバサラの正体」をIV種類に分類している「阿蘇一九九三」。また、先に紹介したサイト「けさらんぱさらん・どと・こむ」（以下「どと・こむ」）でも、4種類+その他のタ

イプを認定している。

### 【資料7】ケサラン・パサランの分類

● 阿蘇和夫『生物学からみたてんさらばさら』「阿蘇

一九九三】

I型・ケサラン・パサラン・植物の冠毛

II型・テンサラバサラ・動物（ウサギ）の毛のついた皮の乾燥したもの

III型・ヘイサラバサラ・動物の結石

IV型・ケシ真珠・変性真珠・変性鉱物

「けさらんばさらん・どつと・こむ」

植物タイプ・「たんぽぼの種つぼいヤツ」

動物タイプ・「けむくじやらな毬」つて感じのもの」「き

つねの落とし物」

鉱物タイプ・「別名「馬ん玉」と言うらしい」

昆虫タイプ・「これは『しろばんば』（井上靖著）にでてくるやつ」

新タイプ（天使の羽タイプ・モダンタイプ・巨大タイプ・ドット式植物タイプ）

の上に、さらなる仲間探しが行なわれていく。<sup>(6)</sup>

「どつと・こむ」の分類は「鉱物タイプ」を「別名「馬ん玉」と言うらしい」と解説している。これらIII型／鉱物タイプの報告は、民俗誌等に「蛇の玉」「馬の玉」「鹿の玉」等と報告されたものを同一視し、膨らんでいく。例えば早川孝太郎が報告した、幸運を呼ぶといわれていた岩本院所蔵の「鹿の玉」「早川一九二六」等が、「幸運が訪れる」「動物の玉」という共通項からケサラン・パサランの一種とみなされ、並べられていく。中でも「狐の玉」は「幸運が訪れる」「珍しい」「毛玉」として、最も近いと指摘される。

### 【資料8】宝珠の玉＝ケサラバサラ

うちにね、宝珠の玉があつたんですって。色は白です。（中略）とにかくね、それはね、いいもんなんですね。何とかつて名前があるんですよ。それはね、白粉おじろいが好きなんですよ。

白粉やらなかつたから、だめになつちゃつた。（中略）ケサラバサラつてんだね。白粉が好きなんだつて。白粉入れなかつたんだよ。だから、食べ物がないから逃げちゃつたんだよ。

白粉入れるつてことを知つてればね。（後略）（話者は東京都

中野区・男性・一九〇九年）「中野区教育委員会一九八六」

これらタイプ分けは『民間伝承』誌上の問答と非常に似かよっている。資料4と同じく、過去の議論や報告から、同一の名称の元に植物質・動物質・鉱物質等の存在が習合され、同じケサラン・パサランの亜種である、と解説される。こうした拡大解釈

「狐の宝珠」は近世期から頻繁に取り沙汰されている呪物で、昔話「八つ化け頭巾」で、小僧が騙し取る狐の靈力の源を「ホー

シの玉」であると語る例も多い。山口県湯本大寧寺の寺宝「狐の玉」や、東京中野法仙寺の寺宝「狐の宝珠」が有名であり、「ケサランパサランは江戸時代からあつた」という例証として持ち出される。この仲間探しは際限なく、果ては「UFOが落すといわれる謎の糸（エンジエルヘア）」等という怪しげなものまで「仲間」として挙げられていく。「でもう一つ、不思議なケサランパサランの例を挙げよう。

【事例9】ケセランパサランは稻の虫

—ところでの、ケセランパサランつてのござ存知ですか？—

あの、こう、なんだかあの、あれでしょ？ 稲、稻のことに、ぶらさがつてんの。あの、こう、苗に下がつたの、でしょ？ 苗に下がつたもの、なんですか？ いえあの、それは地域によつて違うから……

ふーん。それね、あの、それは、苗に虫の巣、みたいなことう、繭みたあな小さいきれいなの、ぶら下がるんだよ。あの、苗に、苗、植えて、あんまり見たこと無いけども、一回か二回くらいかな。俵型の、俵型の、小さい、こう、なんていうのかな、アリの卵みたいな形の、きれいなのが、あの、こう細おいくモノの糸みたいなのからこう、下がるの。あの、このくらいの苗に、今はあの、ああいう機械でやつちやうからだめだけど、あの、ミズナワシロ、の時に、

—じゃあ、田植えする前の稻に、見たことあるんですか—  
はい、はい。

—いつごろ—  
その、田植えの、あ、もう何年も前ですよ。よくあの、「知人」が取つて来て、「あんた、珍しいのほら、とつてきた」って。

—じゃあ、たまたまできることがある—  
ええ、もう、たまたまも何にも、なかなか、見つからないのね。だからまあ、ほんとに俵型の、アリの卵のようなん……

—白いんですか—  
うん、白いの。真つ白でもなかつたね。

—それをケセランパサラン—

うん。「なんだそれ」つていつたら、「ケセランパサラン」つて（笑）。変な名前だなと思つて。（……中略。【知人】の確認。話者より7～8歳年下の女性。……）

—それ、持つてるとなんかいいことがあるとか、いいません？—

—だつてあんた、それ虫の巣でしょ（笑）  
（笑）そりやそうだあ—  
虫の巣だと、思うよ。そのうちにそれ、蛾になつて出てつちやつだらうね。それでもいいけど。

—それは「田植えが」機械になる前—  
そうですよ。今もう機械でねえ、（後略）

（話者は福島県岩瀬郡天栄村・女性・一九二三生）  
〔聴き手 高木史人・竹内邦孔・藤久真菜・飯倉〕

この女性は、「ケセランパサランは稻につく珍しい虫の巣」としている。これは次に挙げる『日本俗信辞典』のいう「俵」や「俵子」とほぼ同じものといえる。

#### 【資料10】稻の虫（俵）の俗信

○愛知県南設楽郡で、苗にコムシの作った俵<sup>タワラコ</sup>がつくと豊作になると、徳島県板野郡でも、苗に俵子（アオムシに寄生するハチの蛹）がつくと豊年になると伝えている。

#### 【鈴木一九八二「苗」】

先に、結論無く終結した「テンサラバサラ問答」を「この点で、この問答が全ての始まりだった」と述べた。それはつまり、現在のケサランパサランをめぐるものいは、一九五〇年代の問答に既に内包されていた、ということである。

初めに「テンサラバサラ」は「毛の塊である」と報告されているにもかかわらず、形状・名称・性質の類似から「鮎苔」や「馬の玉」を「同一のもの」として並置し、認定した。そうした知識がメディアで広まり、日常から、もしくは歴史文献の中からまた新たな報告がなされ、新資料が追加されていった。

ふわふわした白い毛玉。これが「現象」としてのケサランパサランの全てである。そこに、枇杷の木に着く、白粉を食べて増える、持ち主に幸運をもたらす、鉱物質・植物質・動物質が

存在する、等々の性質が「認定」されケサランパサラン像が固まり、そのイメージに類似の物体がまた報告され、像が再び更新される……という知識と現物との往還による「分類」のものいが、ケサランパサランを「正体不明」たらしめている。

そうしてここでの「分類」は、「知識」によつて集められた、

本来異質な存在であるものを、同一名称のもとに「名付け」るための仕組みに他ならない。この仕組みを通じて『しろばんば』は「ケサランパサランのこと書いた小説」として読み直され、中野区の男性は自分の家にあつた「宝珠の玉」が「白粉を喰うケサラバサラ」であつたことに気づき、また天栄村の話者の知人は「稻につく虫」を「ケセランパサラン」であると「発見」したのである。（ケサランパサランもしくはテンサラバサラと呼ばれる「実体」が不可思議であるから、「妖怪」という「知識」や「名付け」によつて秩序への回収が行なわれる）のではなく、ここでは「知識」や「名付け」が先行し、それに見合つ「実体」を見つけだそつとするといつとなみが、本来は何の変哲も無かつたはずのアザミの冠毛や兎の毛玉を、ケサランパサランという「妖怪」として「発見」せしめているのである。

## 五、名付けの導く妖怪現象

さて、このような名付けの導くいとなみの例は、他にも指摘することができる。

【資料11】瑞氣ただよう電氣・ウドンゲの花

村のある家の電氣の傘に異変が起きました。電氣の光を反射して光を下に向ける白い笠に、不思議なものがついたというのです。ランプの時代にはなかつたのだからというのです。それは白い糸が三センチほど、まつすぐ下に延びて十本ほど束のようになつて、その先きっぽに夫々、丸い茶色の球状のものがついていました。村中的人は大騒ぎです。（中略）誰からともなく「ウドンゲの花」という縁起の良いものだとなりました。「ウドンゲの花」だから、余りそばによつてはならん。「傘を動かしてはならん、なぶつてはならん」ということになりました。村人の評判は大変です。電氣の廻りに、それこそ毎晩、黒山の人ばかりです。（後略）【鈴木一九八〇】

資料11は、大正年間、福井での出来事である。電氣の笠に生えた菌類と思われる謎の植物が「ウドンゲの花」と評判になつたという事例である。ウドンゲの花は滅多に無いことの譬えとして「盲龜の浮木優曇華の花」と成句にも使われる著名な存在である。「電燈に花が咲く」という例は他にもある。

【資料12】電燈の笠に花が咲く

鹿児島で、電燈の笠に花が咲くと吉事がある、というのは、ウドンゲ（クサカゲロウの卵）のことであろう。

【鈴木一九八二「虫」】

ここではクサカゲロウの卵をウドンゲといい習わしている。以前は注目されることも無かつた菌類や虫の卵が電燈といふ「メディア」によって注目され、「優曇華の花」として「再発見」されたといえる。このようなことは妖怪現象に限らない。最近の話題から言うと、レッサー・パンダは二本足で立つこともある、という当然のことが、「直立するレッサー・パンダ」として取り上げられることで、至極貴重なことであるかのように「発見」される、というようなことがらも含まれるはずだ。

妖怪現象に戻れば、イメージの元に校合される「妖怪」「未確認生物」の例として、伊藤龍平は「ツチノコの本地」「伊藤二〇〇〇」において、ノヅチ・テンコロヘビ・ゴハツンといった在地の「怪蛇」「妖怪」が「未確認生物」ツチノコとされ、性格を変えていったことを指摘している。

このように、妖怪現象のありようとしては、現象の説明装置として妖怪・怪異の知識・名称を「創り出す」だけではなく、妖怪・怪異の知識・名称が事前に存在し、それに見合う現象を「発見する」ように働く場合もまた、想定される。ケサラン・バサラの場合は、それが「幸運を呼ぶ」という好ましい存在であることや、割合簡単に「実体」を発見できるという事実も、流行が盛り返す一因であるだろう。ケサラン・バサランという知識が、身辺に幸運の種を発見させるのである。

京極夏彦は「モノ化するコト」[京極二〇〇三]で、怪異な「現象」

が「存在」として規定され、現実に存在するキャラクターであるかのよう記述されていく、ということを指摘しているが、「名付けに導かれての現象の発見」はその裏返しともいえる。コト＝現象が、名付けにより、モノ＝実体として取り扱われていく構図に対し、ここでは観念として先行して存在するとされていたモノが、実体としてのコトに当て嵌められていくのである。

ことばこそが、人間の暮らす世界を規定し、創りあげていくことについて、意味論や知覚論・認識論の分野で非常に重要な指摘がなされているが、ここでは触れない。ただ、そうした「知識」のありようとしての「名付け」のもつ意味合いは、非常に大きい。「ことばが実体を規定し、創りあげる」はたらきも、「いま、ここ」の口承文芸あるいは〈口承<sup>(8)</sup>〉を考えると、避けでは通りえない課題となるだろう。

最後に、派生する課題についても触れておきたい。山田巖子は「名付け」を通して、口承文芸の分野の中では蒐集以上の段階に進めていない「語彙研究」もしくは「新語・命名」の研究を開拓できる可能性を指摘している[山田二〇〇五]。本稿でも先行研究でも、「モノ」と「コト」を対立的に立項しての考察が多く、また分析手順として有効であった。しかし妖怪現象を「モノ」と「コト」との対立の図式だけで描き出すことは不可能と思われる。山田は『さぬきななめ』という「モノ／コト」を報告している。これはある集団によつて「名付け」られた、

身体感覚の名称である。ここから、名付けによって日常の身体の些細ないとなみが知覚され、集団内で共有される知識となる過程が読み取れる[山田一九九四]。コト＝モノの二項対立に終始しないためにも、このような「身体／感覚」、もしくは具体的な「現場」からの立論が必要だろう。

さらに、一九五〇年代の『民間伝承』誌上の報告と議論が、一九七〇年代に「ケサラン・パサラン前史」として読まれ、消費されたように、「客観的な観察」と思われている記述が対象を規定し変質させてしまう危険は、不可避のものである。例えば、本稿を論者の意図とは異なつて「簡便なケサラン・パサランの先行研究一覧」として読み込むことも十二分に可能であり、またそれを論者はどうすることもできない。主にその文体によって論議を呼んだ、高木史人「研究者というメディア」[高木二〇〇〇]の本当に論議しなければならなかつた点は、この研究／発表という行為自体の持つあやうさであつたはずだ。

また、ケサラン・パサランの科学的な「正体」は一九七〇年代のブームの時に調べ尽されている。『生物学からみたてんさらばさら』の阿蘇和夫は、ウサギの毛皮を乾燥させてテンサラバラサラを造る特許を取得しており、「ケサパサ」の愛好家たちもこの事実を知っている。それでも「謎の生き物・ケサラン・パサラン」という信仰を捨てようとはしない。「科学では割り切れない何か」は、それだけ人の心をひきつけるといえる。理系のいわゆる「科学者」は、「正しい科学知識が広がれば心靈や超

能力に惑わされる人はいなくなる」と考えがちだが、人間に自分の信じたいものだけを信じるという根強い習性がある限り、ことはそう単純ではないだろう。

そうした「科学で証明できない〇〇」が花開いたのも一九七〇年代、ツチノコ・ネッシー・ヒバゴン・UFO・超能力・心靈写真・コックリサン・口裂け女等が流行した、いわゆるカルトブームの時期であった。伊藤「伊藤二〇〇〇」や、一柳廣孝「一柳二〇〇四」、香川雅信「香川二〇〇五」もそうした状況を指摘している。三〇年を閲した今、一九七〇年代のオカルトブームの分析がなされるべきと考える。

### 注

(1) 妖怪を実体的に論じる人たちが「民俗学」に抱く不満や不信はこの点にあるらしい。一例を示す。

こうした古くからの妖怪の多くは〈人々の生活を戒める教訓を擬人化したもの〉とされているのだそうとして、妖怪研究に秀でた専門の学者の中には、「ウム、妖怪というのはな、人々の心の中におるのぢや。実際に? 現実に? かね? いるわけなかろう、チミ。実際に見た? 見間違ひじやろう。はつはつは」

などと笑い飛ばしてしまわれる方もいらっしゃるのだと聞き及び、やや、妖怪とはそんなものなのかと少々戸惑つておりました。「加藤二〇〇五」

妖怪を「いない」と断じる「専門の学者先生」は尊大で固陋な存在に戯画化されている。「既成の常識や学問」を凝り固まつたものとして批判する、「不思議現象肯定派」のものいいの典型であるだろう。だが、妖怪（幽霊・宇宙人・ツチノコ etc）は「いる」と断じて搖ぎ無い、自らの固陋さが見つめられることはない。

(2) ケサランパンサランを紹介する資料は、多く写真を掲載している。まさしく「見ることは信じること」である。「三崎一九七六」「西一九八〇」「高橋一九八六」「佐藤一九八八」「阿蘇一九九三」「氣仙沼市一九九四」にも写真が掲載されている。本稿では「实物」を示しえないので、是非参考されたい。

(3) 宮武の引用書と「胎内の玉」の名称を挙げる。「本草綱目」鮒苔／『西京雜記』文石／『嘉良喜隨筆』牛玉／『茅窓漫録』鮒苔・狗宝・猿棗・猪醫／『輶耕録』鮒苔／『名義抄』鮒苔／『日本紀』（垂任紀）貉から勾玉が出た記事／『曾丹集』バサラ／『草廬漫筆』鮒苔。

(4) 「ヘイサラバサラ」は現行の『日本国語大辞典』（小学館、二版）にも立項され、「鮒苔」の字が宛てられている。

(5) 論文は民俗学会の『民俗学』に掲載された岡本良知「へいさらばさら考」（一九三一～一九三二）。『南方熊楠からの資料』は『南方熊楠全集』八所収、「明治四十四年十一月二十八日」付「柳田國男宛書簡」57と思

われる。ただし、南方はヘイサラバサラと鮭苔が全く同  
一とはしていない。柳田は佐藤の報告を重視し、『民間伝  
承』に特に有益な資料を寄せた者に柳田が図書を贈呈す  
る制度の第一回目に、佐藤のこの報告を選んでいる。『柳  
田國男全集』三三、三〇九頁および六六八頁参照。

(6) ケサランパサランの語源探しも、「西一九八〇」「小谷野  
一九九三」など散発的に受け継がれてはいるものの、低  
調である。

(7) この「狐の宝珠」の報告例も数多いが、詳細な報告として「粕  
渕一九九三」「倉島一九七六・一九九一・一九九六」等があ  
る。特に倉島の報告は、自らの家の「ホーシンの珠」の發  
見から認定、神社に納めて手放すまでが報告されており、  
貴重である。「狐の宝珠」の辿り着く先は最終的に神社仏  
閣となる。社寺から「寺宝社宝」「開帳」「見世物」と考  
えて行くと、細工の出所がうがえるのではないか。  
知識が実体を呼び寄せる例として見るとき、寺社宝にみ  
られる「馬の角」や、川崎市市民ミュージアム『日本の幻獣』  
展「同館二〇〇四」の数々の剥製たちを、あらたな視角  
から考察できるだろう。

(8) 〈口承〉については「山田二〇〇四」を参照。

引用・参考文献（※週刊誌等の記事は割愛した）

阿蘇和夫『生物学からみたてんそらばさら—生きものと言われ  
た正体をあかす』一九九三

飯倉義之『少年少女民俗誌』『世間話研究』一二、二〇〇一・一〇  
世間話研究会

伊藤龍平「ツチノコの本地」『世間話研究』一〇、一〇〇〇・一〇  
世間話研究会

一柳廣孝「編」『心靈写真は語る』二〇〇四 青弓社

井上佐久良「テンサラバサラ」「民間伝承」一七一七  
一九五三・七 六人社

岡本良知「へいさらばさら考」一〇四『民俗学』三一一、四  
一一、四一、四一三 一九三一・一二、一九三三・一、一九三三  
・二、一九三三・三 民俗学会（編）・岡書院（刊）

香川雅信『江戸の妖怪革命』二〇〇五 河出書房新社

粕渕宏昭「狐の毛玉」について—坂田郡近江町—『民俗文化』  
三六三 一九九三・一二 滋賀民俗学会

加藤一「妖弄記」二〇〇五 マイクロマガジン社  
蒲生明「テンサラバサラ問答（乙）」『民間伝承』一八一四  
一九五四・四 六人社

川崎市市民ミュージアム『呪いと占い』二〇〇一  
川崎市市民ミュージアム『日本の幻獣』二〇〇四

京極夏彦「モノ化するコト—恠異と妖怪を巡る妄想—」  
二〇〇三 東アジア恵異学会『怪異学の技法』臨川書院

倉島幸子「わが家の宝珠の玉」「女性と経験」一 一九七六・一 女性民俗研究会

倉島幸子「孫、ふたたび「ホーシの玉」など」「女性と経験」一六 一九九一・一〇 女性民俗研究会

倉島幸子「ホーシの玉その後」「女性と経験」二一 一九九六・一〇 女性民俗研究会

氣仙沼市『氣仙沼市史Ⅳ 民俗・宗教編』一九九四

小谷野寛一『続々 民俗茶ばなし』一九九三

桜沢エリカ『ケセランパサラ』一九九九 集英社

佐藤光民「テンサラバサラ」『民間伝承』一六一 一九五二・一

日本民俗学会  
佐藤光民『温海町の民俗』一九八八 温海町

鈴木棠三『日本俗信辞典 動・植物編』一九八二 角川書店

鈴木三雄『越前わらべ考』一九八〇 北国出版社

高木史人「研究者というメディア」「口承文芸研究」二三 二〇〇〇・三 日本口承文芸学会

高橋喜平『雪国博物誌』一九八六 クロスロード

中野区教育委員会『中野の昔話・伝説・世間話』一九八六

西君枝『ケサラン・パサラン日記』一九八〇 草風社

西君枝「ケサラン・パサランの語源について」『千葉文華』一六 一九八〇・一 千葉県文化財保護協会

早川孝太郎『猪・鹿・狸』一九二六 地理研究社

三浦みつる『ケサラン・パサラン』一九八一 講談社

三崎一夫『陸前の伝説』一九七六 第一法規出版  
三崎一夫「ケサラン・パサラン」「宮城県百科事典』一九八二 河北新報社

真倉翔・岡野剛『地獄先生ぬ〜べ〜』一四 一九九六 集英社

南方熊楠書簡 一九一一 〔『南方熊楠全集』八 所収〕

宮武省三「テンサラバサラ問答（甲）」「民間伝承」一八一四 一九五四・四 六人社

宮本貢「なくなつたもの」一九九七（記事初出一九七七） 晶文社

村上健司『妖怪事典』一〇〇〇 每日新聞社

『柳田國男全集』三二 一〇〇四 筑摩書房

山田嚴子「ことわざの効力—定型と笑い—」「世間話研究」五 一九九四・六 世間話研究会

山田嚴子「口承—〈口承〉研究の展開—」「日本民俗学」一三三九 二〇〇四・八 日本民俗学会

山田嚴子「目の想像力—耳の想像力—語彙研究の可能性—」「口承文芸研究」二八 一〇〇五・三 日本口承文芸学会

わたりむつこ・ましませつ」「てんさらばさら てんさらばさら 一九八二 福音館

ウェブサイト「けさらんぱさらん・どつと・こむ」<http://www.kesaranpasaran.com/>

(いいくら・よしゆき／国学院大学大学院特別研究生)